

### 日本における朝鮮文学の歴史的意義とその諸問題：可能性の文学として

朴, 春日

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

36

(発行年 / Year)

1957-12-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018935>

# 日本における朝鮮文学の 歴史的意義とその諸問題

—可能性の文学として—

朴 春 日

## 内 容

はじめに

### I 日本における朝鮮文学の位置づけをめぐる

(問題はどのように提起されたか)

(1) 金達寿と魚塘の論争

(2) 徳永直と李殷直の発言

(3) 張赫宙(野口)の場合

### II 日本における朝鮮文学の歴史的意義と民族的個性

(問題の本質とその究明)

(1) 在日朝鮮人作家による日本語作品の誕生について

(2) 在日朝鮮人作家による日本語作品の概観

(3) 文学における民族的個性について

### III 日本における朝鮮文学の新しい任務と創造の道

(可能性の文学として)

- (1) 在日朝鮮人作家の日本語作品と祖国における国語作品  
(2) 新しい任務と創造の道について

▲私 記▼

はじめに

言語は文学の基本的な手段である。

ゴリキーは▲文学の第一要素は言語である▼と云った。

たしかに、ロシア語という基本的な言語手段をのぞいては、今日のような達成を遂げつつあるソヴェト文学を考えることはできないし、日本語をのぞいて、伝統ある日本文学を考えることはできない。

これは、文学芸術にとって言語が生命的存在であるという全く原則的な問題であり、これを歪曲否定し去ったりすることは許されな  
いということを如実に示している。

現在、嵐のような勢いで発展つつある中国文学も、それにつづいて前進をつづける朝鮮文学も、中国語や朝鮮語なしには考えられないであろう。

私は、このような基本的な視点に対しては少しの疑いももっていない。全く自明すぎるほど自明なことであるからだ。

しかしながら、歴史はすべての面にわたって、単純に、機械的にその歯車を進めてはいないということも合わせて知るべきである。

歴史は生き物であり、その法則性と必然性に裏打ちされながら、刻一刻と新しい複雑な現実をわれわれの前にくりひろげていく。

政治に従属しながら、その自律性と個性を保ち絶え間なく進展する文学の歴史も、すべてそうであった。

わけても、古代から現代にいたるまで、幾度となく外圧と苛酷な植民地支配をうけてきた朝鮮の歴史は、そのまま、他に類例をみない文学の歴史とその性格をかたちづくり、さらに、特異な文学現象さえ生んだ。

つまり、日本語で書かれた在日朝鮮人作家の作品がそれである。

これは、苦渋にみちた朝鮮の歴史の必然的な所産である。それ以外のなものでもない。

それは、『文学の国籍は言語に従属する』というありきたりの一般的な概念では、説明しつくされないものを含んでいる。そしてそれは、いわゆる「亡命文学」でもなければ、「移民文学」でもなく、コンラッド (Conrad, Joseph) のようにポーランド人でありながら英語で作品を書いた事実や、また、日本人である野口米次郎が英語による詩作をした事実とは、本質的に異った要因と性格をもっているのだ。

たとえそれが、〃畸型文学〃だときめつけられようが、あるいはまた〃混血文学〃だと云われようが、日本帝国主義の野蛮な支配と屈辱的な日本語の強制という悲惨な歴史事情のもとで生みだされ、云いつくすことのできない民族的苦悩をうたいあげながら現在まで到達したその意義を、われわれは否定できない。

否、むしろ、その苦難にみちた文学の歴史を、あらゆる角度から明らかにし、埋もれた作品を掘りおこし、そして位置づけ、未来への新しい展望をきりひろくことこそ、われわれのなさねばならぬ切実な課題ではないだろうか。

奪われた朝鮮語をすみやかに回復しつつ、強制された日本語を逆に利器とし、今は被圧迫民族となった日本国民に訴えずにはいられない過去のもろもろを訴え、呼びかけ、そして現在の朝鮮と日本の共通の敵に対して闘うことこそ、プロレタリア国際主義の正しい道すじではないだろうか。

私は、それこそが両国民の心と心の友好と団結をうち固め、両国の民族文学をより豊かにする一助となるものと考えてる。

なお、問題の所在を明らかにするため、次のことを書きとめておく。

すなわち、「日本における朝鮮文学」という表現の中には、広義に三つの意味が考えられるということである。一つは、純然と朝鮮語で書かれたもので翻訳を通して日本に紹介される朝鮮文学作品。二つには、在日する(した)朝鮮人作家の朝鮮語による文学作品。三つには、在日する(した)朝鮮人作家の日本語による文学作品である。

私がこの小論で検討するのは、云うまでもなく第三の問題である。

## I 日本における朝鮮文学の位置づけをめぐる

(問題はどのように提起されたか)

一九四八年四月、朝鮮文芸社(東京)から発行された在日朝鮮文学者の機関誌『朝鮮文芸』(日本語版・第二巻第二号)は、はじめて日本における朝鮮文学の位置づけをめぐる論争をかかげた。この論争は在日朝鮮人作家の「用語問題」として特集され、金達寿、魚塘、李殷直の諸氏と、日本の作家徳永直氏のオブザーバー的参加によって行われたが、この重要な問題意識は云うまでもなく以前から疼いていたものである。

厳密に云うならば、朝鮮が日本帝国主義の支配と隷属下におかれたその日から運命づけられてきた問題であり矛盾であった。

### (1) 金達寿と魚塘の論争

魚塘は、『日本語による朝鮮文学に就て』と題する論文の中で、『第一に編集の方が提出した「日本語による朝鮮文学」と云うテーマが、不思議である。文学が言語芸術である以上、その民族の文学はその民族語に従属すべきである、と云うことは常識であるからである。換言すると、朝鮮語なしに朝鮮文学は、なりたないからである』(傍点―朴)として次のような例をあげている。

『かつて、我等の先輩姜鏞訖氏が、米國に於て小説草堂(The Grass roof, by Yong Hill Kang)を公刊するや、忽ち歐羅巴各國語に翻譯され英米文壇にデビューして朝鮮民族の名をなしたしめた事実を想起すべきである。この草堂は、朝鮮の農村の素朴な風景を描写した内容をもち英語で書かれた小説で、朝鮮文壇にとつては、何等裨益するところがなかつた事も周知の通り

である。(略)現に朝鮮文学であると、日本語による文芸運動が展開されているが、再三云う迄もなく朝鮮文学の一つの畸型であつて(略)日本文学の一ジャンルである。』(傍点―朴)

これに対して金達寿は、『一つの可能性』と題する論文の中で、次のようにのべている。

『問題は、それが不幸きわまる原因からではあつたにしろ、過去にも、そして現在でもなおこの日本に「朝鮮人とその生活」がある』と云うことであり『過去のドレイ的境遇に泥沼からしうとくし(させられ)た日本語を使用するしないのことではなく、まず(略)その底に横たわっている過去の境遇を清算して、そこから実質的に解放されることが先決であり、これがまたわれわれの担っている歴史的使命である。(略)敵の武器、それが昨日まで自分を傷つけた敵の武器をもってでも敵を倒せること』を理解し『まず朝鮮人としての自己の民族主体を確立しつつなされるこの文学は、それが日本語で書かれる限りもちろぬ日本民主主義文学の一翼ではあるが、日本における朝鮮人のこれはソヴェエトにおける朝鮮人のこれとともに、朝鮮文学の独特な一環としての可能性を建設すると思われる。』と。(傍点―朴)

### (2) 徳永直と李殷直の発言

このような二つの主張に対して、徳永氏は『日本語の積極的利用』と題する一文の中で

『日本資本主義の侵略によって強制的に日本語を学習させられ、朝鮮語の虐げられた歴史が、この深刻な課題をうみ出したのであるけれど、日本に生れ、或は朝鮮語より日本語の方が自

由であるという朝鮮人が非常に多数である場合、少くとも朝鮮民衆の立場からして、これを積極的に利用することが大切と思う。(略)そして在日朝鮮人作家は朝鮮人名によって、日本語壇に覆を争うべきである。たとえば古くは金竜済が、張赫宙が、金史良が、現在では金達寿や李殷直が、そうであるようにあればいいのだ。』

とのべ、李殷直は『朝鮮人たる私は何故日本語で書くか』と題する一文の中で、

『私は深い自覚もなく、いくつかの短篇を発表した。ただ書けるから書いて出したといわれても仕方のない態度であった。この頃になって、私は、自分の国語と文字で、ようやく文章の書けるうれしさに、やはり我を忘れて書いている。(略)私は、朝鮮人というものを真実にわかってくれようとしぬ多くの日本人に向けて、うんと書かずにはいられない気持ちになった。』とのべている。――

大体、以上のような形で問題は提起されたが、論争それ自体の意義はきわめて重要なものであった。しかし、このように論じられた一九四八年のなかば以後は、ほとんどその影をひそめてしまった観がある。少くとも、これ以後は、この問題に対する『討論』という形が公的にとられず、金達寿の『玄海灘』の「あとがき」や『新芸術評論日報』で李承玉が『日本における朝鮮文学についての感想』を書く中などで、間接的に問題がふれられるにとどまったのである。

この事実は、非常に残念なことであったと云わねばならない。そしてそれは、とりもなおさず、当時の在日朝鮮文学者たちの理論

的、組織的欠陥を意味すると云えよう。なぜならば、前述の論争は、歴史的には一九二七年十月に結成された『朝鮮プロレタリア芸術同盟東京支部』(KAPF)以来今日までの、日本における朝鮮文学の位置づけと評価と総結の問題にまで発展させられねばならず、理論的には言語と民族の問題、そして文学における民族的個性の問題――それはそのまま『社会主義リアリズム』における内容と形式の問題につながる――などの切実な課題の追求まで発展させられなければならなかったからである。にもかかわらず、それは一つの「到達」として投出されてしまった。むしろ、それは一つの「到達」でもあった。すなわち一九一〇年八月、強圧的に武力でもってなった『日韓併合条約』の屈辱的な歴史のはじまりから、『八・一五解放』までの苦渋にみちた朝鮮文学運動の一つの「到達」である。

たとえば、当時のあいつく弾圧のために解体のやむなきに至った『KAPF』東京支部以後、新しく創設された『無産者社』の機関誌「無産者」で、金斗鎔が『芸術運動の困難について』という論文を発表しているが、その中で彼が、『芸術による斗争を(略)このままひたむきに持ちこもうとすれば、朝鮮のような植民地では、必然的に日本帝国主義のきびしい妨害や弾圧を受けざるをえない。従って芸術による斗争は、事実上、不可能である。それよりも、朝鮮ではひとまず芸術斗争をすて、一意政治斗争にのみ専心すべきである。』(傍点―朴)とのべざるをえなかった事実をみて、いかに弾圧が熾烈をきわめたかがわかるし、金達寿、魚塘論争の必然的な因子が、すでに、ここにみこまれていたということが明かにされるだろう。

(3) 張赫宙(野口)の場合。

あるいは、一九三二年「改造」の懸賞小説に『餓鬼道』を当選させた張赫宙が、当時関係の深かった保高德蔵氏の『何故朝鮮語で小説を書かず、日本語で小説を書くのか』という質問に対し、『朝鮮の民族ほど悲惨な民族は世界にも少いでしょう。私はこの実状をどうかして世界に訴えたい。それには朝鮮語では範囲が狭小である。その点、外国語に翻訳される機会も多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならないと思いました。』と答えたその言葉の中にも、形こそことなれ、問題はひそんでいたのである。また、それが直接「用語問題」としての形をとらなくても、一九三一年六月の「ナツプ」(第二卷第二号)に『暁の歌』を発表して注目された金竜濟が、『ナツ咲』、『愛する大陸よ』などの愛国的な詩を作りながら、太平洋戦争がはじまるや、日本帝国主義を讚美する詩を作らざるをえなかった事実の中にも、あるいは、金史良が第二小説集『故郷』の「跋」の中で、『内鮮の一体化はまことに理想的な形で達成されつつある。それには尚種々困難な点を含んではいようが、切実な課題である』とのべざるをえなかった事実の中にも傷は疼きつづけていたのである。

そして、あの歴史的な八・一五解放以後、ただちに『朝鮮文学建設本部』を設けた李泰俊、林和、金南天、李源朝らが多く同志を糾合して開催した「第一回全国文学者大会」(一九四六年二月八、九日)は、文字どおり朝鮮有史以来のものであったが、その大会決議の三つの主要な項目に「用語問題」を含めた事実は、このような暗い歴史に対する終止符であると同時に、用語に対する新しい角度からの奪還の斗争宣言でもあった。

だからこそ、金達寿、魚塘論争は、単なる「用語問題」の追決から、過去のさまざまな起伏に対する理論的な総結と新しい展望のために、もっと組織的に、もっと理論的に解明されなければならないのである。

## II 日本における朝鮮文学の歴史的意義と民族的個性

(問題の本質とその究明)

△朝鮮文芸誌上でかわされた金達寿、魚塘両氏の論争は、「用語問題」として特集されながらも本質的には「言語と民族の問題」であり、「文学芸術における民族的個性の問題」であった。

しかし、前述したように論争は核心を深くえぐり出すことができないまま終わってしまった。

それは、第一に、日本における朝鮮文学の誕生の歴史的背景とその道程、そしてその今後の展望が正しく追求されなかったことからきている。

### (1) 在日朝鮮人作家による日本語作品の誕生について

金達寿は前に引用した論文の中で、在日朝鮮人作家による日本語作品について『問題は、それが不幸きわまる原因からではあったにしろ、過去にも、そして現在でもなおこの日本に「朝鮮人とその生活」があるということ』であるとのべている。平凡なことであるがこれは重要な指摘である。それは、日韓併合以来、強制的に玄海灘を渡らねばならなかった朝鮮人の悲しむべき「渡航史」につながるであろう。そして具体的には一九一〇年八月以降のことである。

すなわち、概括的にみると、一九一五年には、三、九八九人の朝

鮮人が日本に在住し、《朝鮮プロレタリア芸術同盟東京支部》が結成された一九二七年には、一七五、九一人に達している。そして、『朝鮮小説代表作集』（申建・訳編）や『嘉実』（李光洙）、『草深し』『天馬』（金史良）などの作品がでそろ一九四〇年代になると、優に八〇万を突破し、終戦当時は約二百万人にも達したと云われている。

しかし、《KAPF》の東京支部以前にどのような文学運動と作品があつたかは明確ではない。だから、現在の立場から云うと、在日朝鮮人の文学活動が組織的に行はれたのは、一九二七年の《KAPF》東京支部の結成以後とみていいだろう。

この《KAPF》東京支部は『芸術運動』という朝鮮語の機関誌を発行したが、たつた二号で廃刊されてしまった。それは一九二八年二月、高麗共産党に対する日労の大弾圧があつた際、その日本総局も相当な被害をうけ《KAPF》東京支部も解体のやむなきに至つたからである。

ともあれ、同誌の一号では李北満の『朝鮮プロレタリア文学運動の史的展望』、朴英熙の「プロレタリア芸術理論」に関する論文、尹基鼎の小説などが掲載され、二号では金斗鎔の評論、趙重滾の小説『デモンストレーション』などが発表された。

こうした中で、一九三〇年には、新しく《無産者社》が創設され、機関誌『無産者』が発刊された。そして、特にこの機関誌に発表された金午鎔の『芸術運動の困難について』という論文は、前述したようにきわめて重要な問題をもつていた。すなわち、

『前の朝鮮プロレタリア芸術同盟東京支部機関誌「芸術運動」は、支部の力の弱さのため壊滅した。今また自分たちはあらた

に雑誌「無産者」を先頭に押し立てて、芸術による闘争を、直接的に労働者、農民の中へ持ちこもうとすれば、朝鮮のような植民地では、必然的に日本帝国主義のきびしい妨害や弾圧を受けざるをえない。

従つて芸術による闘争は事実上不可能である。それよりも、朝鮮ではひとまず芸術闘争をすてて、一意政治闘争にのみ専心すべきであり、その方が、遥かに効果的でさえある。ことに、プロレタリアートの政治闘争、経済闘争の経験なくして、プロレタリア芸術の創作に従事することは間違である。従つて、芸術闘争をすてて、政治、経済闘争に突きすすむことこそが、かえつてプロレタリア芸術への正しい道を見出すことの第一歩である。』（傍点―朴）

云うまでもなく、この論文から理論的な誤りを指摘することは、さして困難ではない。が、むしろ、われわれにはこの論文の中にみいだされる当時の在日朝鮮人文学運動の具体的な目標と、その形態をつかむことの方が重要である。すなわち、「芸術運動」にしろ「無産者」にしろ、これらの機関誌の発行対象は、在日朝鮮人や日本国民にあるのではなく、朝鮮本国の労働者・農民を対象としていた、という事実である。

それは、これらの機関誌が純然と朝鮮語で発行されていたことによつても裏づけられる。つまり日本の東京でつくられた機関誌が朝鮮本国へむけて送りこまれていたわけである。だから「在日」という条件は朝鮮解放運動の地理的な意味しかもたなかつたわけである。しかも、もう一つ大切なことは、このような朝鮮本土にむけての文学活動が、日本のプロレタリア階級の兄弟的援助のもとになさ

れていたということである。このことは、現在のわれわれに多くの教訓と示唆をあたえるだろう。

次に、金閔鎔の論文の内容であるが、『朝鮮ではひとまず芸術闘争をすてて』と云う論述が何を意味するかと云うことである。これは一九二五年八月に朝鮮プロレタリア芸術同盟(KAPF)を創設した全朝鮮人文学者、芸術家たちの統一した意見でないことは云うまでもない。つまり、「在日」する朝鮮文学者の側から発言されたことに重要な意味がある。

それは、それまでの在日朝鮮文学者たちの文学活動における目標、形態、方法などの行きづまりを意味し、もつと別な形での創意的な運動方法が必要になつてきたことを意味するものである。さらに、そういった方向への屈折は、その翌年、すなわち一九三一年三月の「ナツプ」に発表された安漠の『朝鮮に於けるプロレタリア芸術運動の現状』という論文の中で一層明確な形をとつた。

すなわち、安漠はその論文の最後の部分で『日鮮プロレタリア芸術運動の組織的連結に於いて』次のようにのべている。

『日本並びに朝鮮に於けるプロレタリア芸術運動は今やボルシェヴィキ的攻勢を取り初めた。斯かる時期に於いて日鮮プロレタリア芸術運動の組織的連結は最も要求されることである。一九三〇年十一月ハリコフに於いて開かれた「国際プロレタリア革命作家大会」の日本の文学運動に関する決議の中でも強調された如く、ナツプは朝鮮プロレタリア芸術運動に最も注意を払い最大の援助を与えなければならぬ。「ナツプ」と「カツプ」とは組織的連結を速かに確立しなければならぬ。これが日鮮プロレタリア芸術運動の当面の重大な課題である。』と。そして、こういつた一連の新しい動きは、

遂に一九三二年一月、「コップ」内に「朝鮮協議会」を設置し、『朝鮮・台湾委員会の確立に於いて』という指令を全国の支部ならびに支部準備会に対して発したのである。

『日本帝国主義は、日本の労働者農民労働大衆に対すると同様、朝鮮台湾等の植民地民衆に対しても又、その残忍な搾取と抑圧とをますます強化させている。(略)現に日本だけでさえ、少くとも六十万の朝鮮人労働者がきている。しかしこれらの朝鮮人労働者は、日本帝国主義の差別賃金(略)で一そう搾られ、危険な苛酷な労働でさいなまされている。そればかりか、民族的侮蔑と迫害との鞭を浴びつつ、その文化も、きわめて低い水準のまま打ち捨てられてかえりみられない。(略)

いうまでもなく、基本的には一さいの文化反動の影響から植民地労働大衆を切りはなし(略)そしてそれを日本プロレタリアートの陣列へ駆りたてることによつて、「多数者獲得」の課題に答えることである。

それと同時に、植民地労働大衆の中からそれ自身の文学を引き出し、成長発展させることによつて、凡ての文化反動への逆襲を押しすすめることである。』(傍点―朴)

こうして「朝鮮協議会」から、朝鮮語による階級的哲蒙誌『ウリトンム』(一九三二年五月「われらの仲間」)が金閔鎔の編集によつて発行されたが、たび重なる弾圧のために大きな成果をあげるこ

とができず挫折してしまつた。……  
こうした激烈な情勢の間をぬつて、一九二九年には朴達が『暴圧に抗して』という日本語詩を「戦旗」4月号に発表し、つづいて同年六月には姜文錫が『われらはピオニール』という詩を同じく「戦



旗」に発表した。そして更に一九三一年には金竜済が『暁の歌』(「ナツプ」第二巻二号)、『愛する大陸よ』(「ナツプ」(第二巻十号)、『国境』(ナツプ第二巻十一号)などの美しい日本語詩をひっさげて登場し、翌一九三二年には張赫宙が『餓鬼道』(「改造」4月号)、『追われる人々』(「改造」6月号)を、そして朴能が『味方』(「プロレタリア文学」9月号)という日本語小説をもつて登場してきた。

こうして在日朝鮮人作家による日本語作品はその血まみれた誕生をみたのである。

## (2) 在日朝鮮人作家による日本語作品の概観

金達寿、魚塘論争では、この問題に対する言及は残念ながら行われなかつたが、しいて求めれば、『過去においては、われわれが日本語で文学するということは(略)つまり不幸であつた朝鮮文学をなお一そう自分でその不幸の泥沼へ押し入れることであつた。』(金達寿)という意見がそれであろう。

だが、この意見が一面的であることは云うまでもない。たしかにそれは過去の、例えば朝鮮語の歌をうたえば五十円也の罰金を科せられたいわゆる「歌一つ五十円」の悲惨な時代。あるいは「皇国臣民の誓詞」による日本語の強制。あるいは唯一の日本語文学雑誌『国民文学』への屈従と強制などを考えるとき、また金史良でさえ、日本軍隊の宣伝小説を書かざるをえなかつた事情を考える場合、うなずけないわけではない。しかし、だからと云つて日本語による朝鮮人作家の作品全体を、朝鮮民族の不幸とすることはできないだろう。たとえば金竜済、張赫宙の初期の作品、そして金鐘漢の『くらいまつくす』などの詩、さらに金史良の『光りの中に』や

『草深し』などの一連の小説、そして日本の評論家岩上順一氏が『東洋の小ゴリキー』と評した洪鐘羽の『耕す人々の群』などの愛国的な名作を、われわれは忘れないだろう。屈折はあつた。たとえば『餓鬼道』を発表した張赫宙は、一九三二年に一たん日本プロレタリア作家同盟に入る決意をしながら、のちにそれを取消してしまつた。そして彼自身の内部に巣喰う小市民的なイデオロギーとコスモポリタンの姿勢からぬけきれず、結局は現在のように日本人に帰化するという道を歩ゆんでしまつたし、また、金竜済も遂には日本帝国主義の前にその頭をたれ、民族を裏切つてしまつた。

### 愛する大陸よ

#### 飢えた平原

それがお前の胸のひろがりだ

赭くはげた山脈

それがお前のやせこけた背すじだ

母の懐——お前の子らの寢床は傷だらけ……

死屍に充ち

鮮血を浴びて……

ああ、植民地地獄の野山には

一滴の水を汲む自由もなく

一束の芝を刈る木蔭もない……

と、うたつた彼は、彼自身によつて「愛する大陸」を裏切つてしまつたのである。

また金鐘漢の美しい詩は、痛切な祖国への愛情にささえられ、

『くらいまつくす』として結実した。

三本の絃いとが切れても

G線上のありあは奏でられる。

びひ止めにされた蝶よ

はかない命よ はばたくがよい

死と生の刃やいばの上で

お祈りした三十歳の言葉は

高麗古磯の意匠よりも絢爛であつた

こはれた楽器のやうに

音楽を欲しながら

また洪鐘羽は、細田民樹氏の助力により青木洪という名で『耕す人々の群』というすぐれた長篇小説を発表したが、この作品は一九四一年四月に東京銀座の第一書房から出版されたものである。

北朝鮮の疲弊した寒村の一貧農を主人公に地をなめるような生活をいとなく母親と可憐な盲目の妹、そして働きの弟らを中心に、あたたかな愛情にみちた人間関係を感動的に描いている。幼い日本語ではある。そして技法的にははるかに赫宙や史良におとるかもしれないが、民族的な苦悩をうすつたスローガン式に、あるいは不安定な感傷の中にとけこましてはいない。

暗くきびしい生活の中で、明るい底ぬけの楽天性にささえられた生つ粋の朝鮮農民のど、性、骨を、素朴に、美しく、リアルに描きだしたのである。

あるいはまた、金史良を忘れることができるだろうか。彼は一九

三九年の終り頃から一九四二年のはじめ頃までに、すぐれたいくつかの短篇を発表したが、周知のように『光りの中に』や『草深し』は芥川賞候補作品となつた秀作である。

彼は日本を去つて朝鮮へ帰ると△国民文学▽誌に『太白山脈』という長篇を連載し、総督府の朝鮮語紙「毎日新報」に『海への歌』という日本海軍の宣伝小説を書いてみせることなどで、朝鮮軍の報道班員となることができ、△皇軍慰問△に名をかりて大陸へ渡ることに成功した。そしてそこから脱走した史良は計画どおり八路軍に附属していた朝鮮義勇軍の従軍記者となつて祖国解放の戦いに参加したのである。

金史良のこのような不屈な魂は、彼が當日頃憧憬していた朝鮮伝説上の鉄を喰う虫△ブルガサリ(不可殺伊)△そのものの権化であつたと云うべきであろう。

また、一貫して朝鮮民謡や童謡を日本に紹介した金素雲の業績もこの上なく貴重なものである。

紅い上衣チヨウリの

小襟の下に

花が咲いたよ

まるまると

花は花でも

乳房ちぶちぶの花は

さまのほかには

摘つまされぬ

という訳詩は美しいリズムをそのまま伝えており、また、

京の両班 おつ死んだ

やれやれ なぜまたおつ死んだ

かまどのそばで

めしの催促 しをつて

そこへ出て来た 蟻の子に

きんたま嚙まれて おつ死んだ

という風刺にみちた童謡の訳業も貴重なものである。それらは『朝鮮民謡集』（一九二九年、泰文館）や『朝鮮童謡選』（一九三三年、岩波書店）などに収録されている。――

以上のように概観的にみてきただけでも、いかに多くの作品が生まだされ、作家は苦難な道を歩ゆんだかがわかるだろう。

### (3) 文学における民族的個性について

金達寿、魚塘論争の第一の問題点は、在日朝鮮人作家の日本語作品を歴史、社会的に正しく位置づけ評価できなかつたということであつた。それは今までのべたとおりである。

第二の問題は、云うでもなく在日朝鮮人作家の日本語作品における民族的個性の認識の問題である。

魚塘は云う。『文学が言語芸術である以上、その民族の文学はその民族語に従属すべきである。』と。すなわち朝鮮文学は朝鮮語、という民族語なしには成立しない、ということである。これは全く正しい。しかし、氏はこのような原則的な命題から、在日朝鮮人作家の日本語作品を「畸型」だとし、「日本文学の一ジャンル」だと規

定している。これは明らかに公式主義的な断定であり、民族主義的なセクトである。

そして、こうした誤りは何よりも文学における民族的個性のとりえ方が、図式的であるところからきている。

きわめて原則的な問題として、文学における民族的性格はその民族語からくるものである。なぜなら、民族語はその民族の思维形式の反映であり、その国の全社会と全階級により幾世紀にもわたる歴史の積み重ねによつて培われ豊富にされてきたからである。

しかしながら、文学における民族的性格を単に、その民族語だけから求めることは正しくない。つまり、民族語はその国の民族文学を創造するための基本的な手段であつて、その文学の民族性をかたちづくる全内容ではないということである。

たとえば、朝鮮語は、現に南朝鮮で創作されている反民族的好戦文学にも、あるいは、北朝鮮で創作されている文学作品にも共通に奉仕しているという事実がそれである。むろん多少の差はある。しかし基本的には共通な奉仕である。

またもし仮に、文学における民族性が単にその民族語だけから求められたのが正しいとすれば、翻訳によつては、他国の民族文学を正しく理解できないことになる。つまり、ロシア語による作品が、一度日本語に翻訳された瞬間から、ロシア的民族性はその作品から姿を消すことになる訳である。これは、全くのナンセンスであり、文学以前の問題だと云わねばならない。

もう一つ重要な事実がある。すなわち、一九五四年十二月十五日から二十六日まで開かれた第二回ソヴェト作家大会で、グルジアの作家アバシーゼが発言（第三日）した内容である。

『残念ながら、ソヴェト文学理論において社会主義芸術および文学の民族的形式的問題が目下のところまだその研究がきわめて微弱である。』

芸術文学の民族的形式をたんに民族語の概念だけで規定してはならない。言葉のほかにも、その民族が有する民族的性格の独自性や、その民族の生活慣習の特殊性や、民族的文化伝統や、さらには民族芸術のうちに独特な色彩、美とメロデーの独特な融合を生み出している、それぞれの国の独自の自然が、民族的形式を規定しているのである』と。(傍点―朴)

勿論、ここで問題にされている主点は異なる。しかし、この発言は、文学における民族的性格をただ単に民族語だけから求めようとする根柢よい考え方を正しく批判した意見として貴重な位置をもつものである。

スターリンは云つている。『民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性を基礎にして生じたところの歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である。(略)だから言語の共通性ということは、民族の特徴の一つである』と。

また、日本の評論家小田切秀雄氏は『戦後文学の成立』(一九四七・三)という論文の中で、まづ先に『日本帝国主義から解放された朝鮮の文学作品』をとりあげ、金達寿の短篇『ごみ』を評しながら、次のようにのべている。

『短篇「ごみ」は、日本へ渡航してきて屑屋となつた一朝鮮人の底抜けの善良さとねばり強い生活力を描いて、時には筆がすべり過ぎるまでの自在なたくましい表現力を示している。それ

が日本語で書きおろされているのが不思議に見えるくらいに、こゝには民族的個性が脂つくくくじみ出ており、文学作品としても最近の日本の文学の世界に十分に自己を主張し得るものとなつている』と。(傍点―朴)

この指摘は、単に一つの作品に対してなされたものではなく、外国語によつても十分に自民族の個性ともろもろの課題を形象することが出来るという可能性の確認に対する指摘でありその具体的な裏づけである。

なぜならば、一九四五年の五月に、金達寿のはじめての長篇『後裔の街』が発表されたとき、小田切氏はその著書の解説のところでいみじくも次のようにのべているからである。すなわち、『ここには朝鮮文学の新しい可能の一つが開かれている。(略)日本語によつて書かれたこの作品は、朝鮮民族の文学であると同時にまた日本文学の一つとして、こんにちの低迷した文学界にとつて一つのすぐれた収穫たるをうしなわない』(傍点―朴)と。

われわれがこのような広い視点に立つならば、いわゆる『文学の国籍はその言語に従属する』という一般的な「文学国籍論」でもつて、在日朝鮮人作家の日本語作品をかたづけるといふ公式主義的な誤りから解き放たれることが出来るだろう。

### Ⅲ 日本における朝鮮文学の新しい任務と創造の道

(可能性の文学として)

可能性の文学として在日朝鮮人作家による日本語作品の位置づけについては、すでにのべたとおりである。「文学国籍論」は一面妥

当なものを含みつつ、一面ブルジョア的な民族主義を鼓吹したものであつて、危険なものを含んでいると云わねばならない。しかしながら、だからと云つて、ここで、在日朝鮮人作家の日本語作品と祖国における国語作品とを全くのイコールで結ぼうと云うのではない。なぜなら明らかに異つた側面をもつてゐるからである。

(1) 在日朝鮮人作家の日本語作品と祖国における国語作品

祖国における朝鮮文学は朝鮮の民族語を手段として文学的な形象の可能性を追求している。これは、明かに異質な側面である。

言葉をかえて云えば、祖国における朝鮮文学は、朝鮮民族の伝統的な思维形式の反映である朝鮮語を使つて、朝鮮民族のうたいあげねばならない民族的課題を文学的に形象していくのに対して、在日朝鮮人作家は（それが不幸きわる原因からではあつたにしろ）、日本民族の伝統的な思维形式の反映である日本語を使つて、朝鮮民族全体のうたいあげねばならない民族的課題と、「在日」という歴史的な条件がもたらす生活と権利の課題とを文学的に形象していくからである。しかも、この異つた側面をもつ「朝鮮文学」の可能性は、両者ともにすでに実証されつつあるのである。

更に、それを言語学的な立場から考えるならば、祖国の文学者たちは直接的な形で幾世紀にもわたつて蓄積された朝鮮語を更に美しくきたえ豊かにして行くであろうが、在日朝鮮人作家たちは（日本語で書くかぎり）、日本語にそれらの可能性を裏づけており、国語によつて作品を書くときにはじめて祖国の文学者たちのような可能性をもちうるということである。

しかも、この際、日本語と朝鮮語による言語交配が、かなり科学的に行われるであろう。

それは、朝鮮と日本が「平和共存」の輝かしい関係に立つとき、更に完全な形をとるだろうと思われる。

以上のような見地に立つて全体的な結論をのべるならば、在日朝鮮人作家による日本語作品は、決して「畸型文学」でも「混血文学」でもなく、栄光ある朝鮮文学であるということである。

その作品が、常に、直面する祖国の無限な課題を主題にして、正しく形象されているかぎり、朝鮮民族文学の国際的な意義ある一翼としての使命を果して行くということである。

そして、その可能性はますます強固に裏づけられて来ており、朝鮮と日本の国交調整という切実な課題を前にする今日では、それらのよりすぐれた作品の必要性がますます高くなつて来ているのである。

朝鮮語は奪われなかつた。それはスターリンが『マルクス主義と言語学の諸問題』でのべている次のような理論に裏づけられているからである。『歴史が書きしるしているように、言語は、きわめてねばりづよく、かつ強制的な同化に対して大きな抵抗力がある。』(略) 言語のねばりづよさは、言語の文法構造と基本的な単語のたぐわえがねばりづよいことから証明される。』と。

われわれは、朝鮮語に対する民族的な感傷や国粹主義を排し、科学的な方法とあたたかい思いやりとによつて、すみやかに朝鮮語を恢復しなければならぬであろう。

(2) 新しい任務と創造の道について

日本における朝鮮文学のすぐれた作家の一人である金達寿氏は、その雄大な長篇『玄海灘』の「あとがき」で次のようにのべている。

『わが朝鮮人民軍はよくたたかつた。(略)世界最強を誇るアメリカ帝國主義軍を主力とするいわゆる國際連合軍を迎えて、さいごまで堂々とよくたたかつた。(略)』

私はこの日本、東京の一角で、朝鮮人のこのようなエネルギーのよつて来たつたところはどこか、それは決して偶然のものではないという、その歴史的裏づけを少しでもしようと思つてこれをかきはじめた。

深夜、頭上をアメリカ軍航空機の飛んでゆく爆音をききながら、うんうん唸るような気持ちでかきつづけた。

同時にまたその地味な役割をもかちつつ。そしてこれを直接うけとる日本人にたいしては、民族の独立を失つた帝國主義下の植民地人というものが、どういうものであるかということをしめすつもりであつた。

これは現下の日本人にとつて、もつとも積極的な課題でなくてはならないはずである。

私がいままで日本語でものをかいてきた意図の一半のすべては、この二つのことにかかつている。』と。(傍点—朴)

ここでのべられている氏の感動的な文章の中には、日本における朝鮮文学の存在意義が正しくふまえられている。

このような基礎に立つて今後の新しい展望を正確につくり出して行かなければならぬだろう。

戦後十年の、日本における朝鮮文学は、一九三一年代の胚胎期から、「八・一五」までの苦難にみちた抵抗期を経て、今日に至つている。

『後裔の街』や『玄海灘』、そして『火繩銃のうた』や『朝鮮冬

物語』などのすぐれた愛国的作品を生み出しながら。――

しかし、あの朝鮮戦争の悲劇にたえられなかつた張赫宙は、遂に野口赫宙となつて、彼をいまままで支えて来た民族的作家主体をコスモポリタニシルの手にゆだててしまった。

そして、かつて彼を内側から支え、燃焼させ、彼の生命と生きる道をさし示した祖国朝鮮と朝鮮民族の姿は、もはや彼の作品の単なる異色の素材や題材と化してしまつたのである。

『無窮花』などの作品がそれである。だが、日本人に帰化した彼は、決して日本民族自体の切実な平和と独立の要求を、彼自身の作品の中に形象しえないだろう。なぜなら、彼が朝鮮民族の一員であつた時とおとらない苛酷な米国の支配が日本にあるからであり、闘いこそが日本人の唯一の生きる道だからである。

彼の残された唯一の道は、彼自身が書いた『餓鬼道』の時代の愛国的な作家主体にもどること以外にはない。それが彼の正しく生きる道であり、われわれがのぞむ生き方であり、そして、その可能性は決してとぎされてはいない。

張赫宙がその道をえらばぬかぎり、日本という「国籍」をもつていても、ピエロ的な無国籍文学をただ一つの自慰的自己否定としながら、敗北の道に落ちて行くだけだろう。――

多くの愛国的な無名作家や金史良などの闘いとつた抵抗と愛国的文学精神は、現在、金時鐘、金石範、金泰生、李承玉、安宇植、金太中、康敏星、南民樹、姜舜、金棟日、吳隆、柳志浩、李述三、張闢植、伊紫遠、許南麒、金達寿などの作家や詩人、文学研究者たちによつて正しくうけつがれ、生き生きとした新しい展望をきりひらいていこうとしている。

また、国語による創作活動はかつてない高まりをみせ、われわれに一層の確信と希望を与えると同時に祖国における文学作品と同じような芸術可能性の追求に力づよい前進を示している。

これは、金民、柳碧、金泰京、尹光永、李毀直、朴元俊、金洪喆、金宙泰、林昶相、李景仙、南時雨などの詩人、作家、文学研究者たちによつて組織されていこうとしている。

そして、在日朝鮮人作家による日本語作品の活動や国語作品の活動は、ともに《在日朝鮮文学会》を主軸として、ともに朝鮮民主主義人民共和国の公民として共和国の平和共存の精神にみちだかれた外交政策を固く守り、日本と朝鮮の国交調整と日本国民と朝鮮人民の心からの連帯と友情をめざした正しい方向へ発展させられて行くだろう。

更に、祖国のすぐれた文学作品を日本国民の心にきざみ、日本のすぐれた文学作品を誰よりも在日朝鮮人文学者の手で祖国へ紹介しなければならぬし、在日朝鮮人作品も、その作家自身の手によつて翻訳され、祖国の民衆に与えられなければならないであろう。

そして、何よりも、日本における朝鮮文学は、金日成元師の『作家・芸術家に与える激励の言葉』に示された崇高な愛国主義に裏づけられたプロレタリア国際主義の典型の一つとして、日本の文学者と朝鮮の文学者の間の『最高の友情行為』にまで高められなければならないであろう。

在日朝鮮人作家による日本語作品の活動の前には、まだまだ多くの問題と困難が横たわっている。張赫宙の落込んだコスモポリタニズムの道は、その最も大きな危険の一つであろう。そして現にこのような傾向は少からず在日する朝鮮人作家たちを虫ばんでいる。

だが、朝鮮民族としての誇りとその作家主体の確立をめざす闘いがつづけられるかぎり、コスモポリタニズムはわれわれと無縁のものになるだろう。

#### 《私記》

これは一九五六年度に提出した私の卒業論文です。云うまでもなく、この論文を書くにあたっては日本文学科の諸先生から多くの貴重な御教示をいただきました。大切な資料を長期にわたつて貸与下さつた小田切秀雄先生や、生活をともにしながら激励して下さいました正木信一先生をはじめ、小原元、広末保、猪野謙二、石母田正の諸先生方には心からお礼を申しあげたいと思います。

今回、この未熟な論文を発表できることは、私自身にとつて非常なよろこびです。どうか御批評をおよせ下さい。なお、編集部の意見もあつて多少の書き直しや、つけ加えをしましたが、『在日朝鮮文学年表』は紙数の関係で省きました。

一九五七年十月二十一日

(昭和三十一年卒 朝鮮人高等学校教諭)